

古代の皮革 3. ヨーロッパ

元北海道大学農学研究科 竹之内 一 昭

1. はじめに

古代ローマ人は地中海一帯を「日の出るところ」という意味でオリエントと称した。紀元前8世紀頃、ギリシャとオリエントとの交流が活発になり、鉄・銅・錫・銀などの金属がギリシャにもたらされ、武器や農具、日用品などに供され、一方、ギリシャからは農作物の他に土器などがもたらされた。オリエントにおいては、金属細工や織物ばかりでなく、皮革製品も発達していた。オーク（櫟）や他の樹木の皮や明礬を用いた鞣しが行われており、さらに染色も行われていた。これらの製品やその製造技術もヨーロッパにもたらされた。

2. ギリシャ

ギリシャは紀元前2000年頃からクレタ文明、ついでミケーネ文明が栄え、前900年頃ポリスができ一層発展した。ギリシャではエジプト同様に多数の家畜を飼育していたが、黒海地域、後にシチリア島や小アジアからも原皮を輸入していた。革製品としては、履物や手袋、革袋、敷物、紐類等である¹⁾。最も原始的な靴は一枚の仔牛皮で足を包むようにして、それを皮紐でむすぶというものであった。これをカルバティーネ（ギリシャ語でカルバティナイ）と称する。古代ギリシャでは、裸足の人もいたが、多くは底革に革紐を付けたサンダルを使用した。さらに爪先や踵の部分に革を取り付けたものもあった。6世紀頃のぶどう酒を入れる壺（クラテル）や杯（キュリクス）

に靴屋の様子が描かれている（図1）²⁾。またギリシャ神話の金の入った革袋を持っているヘレメス（メリウス）やぶどう酒の入った革袋を持っているシレヌスが描かれている（図2）^{2,3)}。ぶどう酒は古くからギリシャとイタリアの特産品であり、北方ヨーロッパやアラビア、インド方面への輸出品でもあった。この時代、革は日常の生活用品であり、また軍備品でもあった。「イーリアス」（ホメロス作の英雄叙事詩 紀元前9世紀頃）に描かれる兵士は兜と胸甲、臍当てを身に付け、楯と槍を持つという装備であった⁴⁾。兜については、牡牛の皮または



図1 古代ギリシャの靴屋
(壺 前6世紀)²⁾



図2 ぶどう酒を入れる革袋
(酒杯 前5世紀)²⁾



図3 ミケーネ式の装甲(左)と青銅の胸甲(右)
(左、前15世紀頃；右、前720年頃)⁵⁾

青銅製であり、馬の尾の飾りが付いていた。クサネコ（イタチの一種）の皮の兜もあった。胸甲と臍当ては青銅であったが、鎧の下端には下半身の防護に革製の草摺くさずりを垂らした。楯は皮製と青銅製があり、真中に握り用の革の環がついていた。牡牛の皮を数枚重ねた直径1メートルの大楯などもあった。さらに皮の上に青銅を張り、あるいは青銅の上に皮を張ったものもあった。デンドウラの墓から前15世紀の青銅製の鎧と猪の牙製の兜が出土しているが（図3）⁵⁾、「イーリアス」に、これを説明したような箇所があり、外側には猪の白い牙を隙間無く取り付け、内側は革紐とフェルトで補強された皮製の兜とある。さらに革のサンダルを履き、足まで届く大きなライオンの毛皮や斑のあるヒョウの毛皮をまといとか、オオカミの毛皮を肩にかけなどと記述されている。ギリシャの二輪戦車はエジプトの戦車と同様に車台が編んだ革紐で出来ており、正面や側面の衝立が革や編んだ革紐で木の枠組みを覆っていた⁶⁾。また革紐や革帯は手綱や牽引具、締め具として使用されている。牛や山羊の皮は使用されたが、羊や豚の皮は使用されていない。

「イーリアス」には、戦闘後の地にまみれた兵士の様子を、大きな牡牛の皮を油に浸してから、引き伸ばしたようだと記している⁴⁾。これは油脂（主に豚の脂）を皮に塗る油鞣しを示している¹⁾。皮を伸ばすこ

とにより湿り気が無くなり、油がしみ込んでさらに伸びる。油脂が革の柔軟性と耐久性に効果があることが知られていたと考えられる。ホメーロスは植物や明礬のことは述べておらず、この時代のギリシャでは油鞣しが行われていたと推定される。

職人は陶工、鍛冶屋、革工など職種ごとにまとまって住んでいた。アテネの復元図には、発掘された靴職人シモンの店舗付き住居が描かれている⁷⁾。その横でシモンが支持したと言われる哲学者ソクラテスが市民らと話をしている。紀元前5～3世紀頃には製革業が盛んになり、この時代にオークやミルテ等の樹皮や果実にある強い渋味に毒（矢に塗る）や解毒の作用があることが知られ、後に鞣し剤としても利用された。すなわち鞣皮性のある植物は薬剤としても利用されていた。オークの没食子もっしよくし（虫による瘤）、松やハンノキの樹皮、ヴァロニアの殻斗およびスマックの葉等も使用された。またこの時代に、はっきりした証拠はないが、ローマと同様に明礬鞣しも行われていたと思われる。

書写用の parchments は四角形に裁断され、必要に応じてエジプトのパピルスやユダヤの柔らかい皮と同様に長いロールにつなぎ、巻物（スクロール scroll）として円筒に保管された。2世紀には、新しい parchments が開発された。これを“コーデックス codex”と称し、四角い parchments を2つ折りにし、さらに4つ折り、8つ折りにし、これを集めて巻あるいは冊（volume）とし、これが今日の本（book）となった⁸⁾。3世紀以降 parchments は紙が中国から伝わる近代まで広く利用された。

ギリシャは東地中海の諸島やシリア、レバノンとの交易が盛んであり、その船のロープや帆にも一部革が利用されていた^{1,9)}。

3. ローマ

ローマでは紀元前6～4世紀に都市国家

が成立し、紀元前後に地中海を支配し大帝国が成立した。古代ギリシャの哲学者プラタルコスによると、ローマ帝政時代には、コレギウムという8つの同職団体が存在し、それに靴屋と革屋があったということだが、これが歴史的事実かどうかははっきりしない¹⁾。しかし、当時これらの職業や革帯、馬具、楯、ぶどう酒や油の革袋等の職人が存在していたことは確かである⁹⁾。ローマの製革技術はギリシャのそれに類似しており、脱毛に尿で腐らせた桑の葉を使用し、鞣しにオーク、松、しだれ柳、はんのき、スマックおよび没食子等を使用していた¹⁾。没食子の代わりにとげのあるアカシア（アラビアゴムもどき）の莢や種、葉が用いられ、さらにこの莢を煮沸・蒸発させて薬剤を調製した。これが後に抽出鞣し液（タンニンエキス）となった。ローマでは明礬鞣しの薄物革を“aluta”と称していた²⁾。油鞣しについての文献はないが、ギリシャと同様に行われていたと思われる。黒い革はえのき属の樹皮、茜の根および緑礬（硫酸鉄）を含む胆礬（硫酸銅）を用いて染色された。多様な色はむらさき、リトマス苔、えんじ、サフラン、ザクロ、もくせい草および藍等で染色した。

古代ローマの歩兵が履いた靴（ガリガと称した）は植物タンニン鞣しの革を2枚以上重ねて縫い合わせて厚い靴底とし、それに鉄製の鋌やスパイクを取り付け、甲は革紐あるいは編み上げであった²⁾。一般人はサンダルや靴を履いた。帝王は紫色、貴族は黄・赤・緑の靴を履き、平民は黒色の靴を履いた。これらは明礬鞣しの染色した革であろう。日本の古代では、高貴の男性は黒色の烏皮烏くわかわのくつを履き、女性は緑烏みどりのくつを履いた¹⁰⁾。歩兵用の丸楯（パルマ）は皮製であり、半円筒形の全身を隠すほどの大きな楯（スクトゥム）は板を革で覆ったものであった。代表的な鎧（ロリカ）は青銅板であるが、肩や腰を青銅または革の短冊形の

札さねで覆った。この時代に鎖帷子くさりかたびらが発達したが、金属製あるいは革製の小札鎧こざねよろいも登場した。

地中海交易が盛んであり、オステリアはローマへの食料を供給する港町となった。物資輸送の帆船の帆に革も使用されていた²⁾。

パーチメントの製造はローマ帝国時代に徐々に発達し、文字を書かない面を染色することもまれではなかった。その後、北西ヨーロッパにキリスト教とともに普及した。

紀元前4世紀頃繁栄したイタリアのポンペイ遺跡の発掘において、鞣し作業場の跡が発見された（1873年）¹⁾。それは8.50×9mの大きさで、一部が低い壁で仕切られており、15個の丸い穴と、その4個ごとに長方形の穴が3個ある（図4）¹⁾。それらにはスタッコ（石膏、砂、生石灰の混合物）が塗られており、各々に注入用と排出用の2個の穴が開いている。壺には鞣し液があり、大きい丸い穴は植物タンニン鞣しに、長方形の小さい穴は明礬鞣しに使用されたことが推定される。使用した長方形のスリッカー（銀面や肉面を粗く削る刃物）や弓形の銼刀、半月形の靴屋用包丁などの道具類も発見されている¹⁾。さらに山羊の革袋から酒が出過ぎないように袋の口を押さえている酒神の従者サテュロス像（青銅）が出土している¹¹⁾。またライン川近くの国境の遺跡からも、多くの革の残欠や製革用の道具類が発掘され、ドイツのマインツやボンの博物館に保存されている。

4. 北・中部ヨーロッパ

ゲルマン民族は北ヨーロッパに住み牧畜

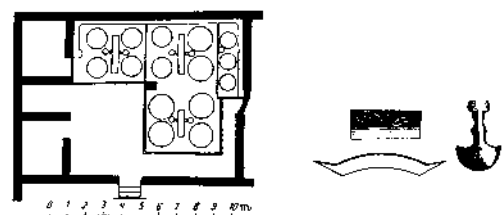


図4 ポンペイの製革場の平面図と道具（紀元79年埋没）¹⁾

と農耕を行い、紀元前1世紀頃にはローマ帝国の周辺にまで移動した。この頃、衣類として羊毛や亜麻、鞣皮と共に家畜や野生動物の毛皮も利用していたことは疑いない。このことは羊の毛皮が沼沢地の遺体の側に多く存在していたことから言え、そのほかにも山羊や鹿、熊、アザラシ等の皮も利用していたであろう。古代(3~4世紀)の靴や毛皮の遺物が多数残存しており、それらは主に北ドイツ、スカンジナビア、オランダのものである¹⁾。キールのシュレスヴィヒ・ホルシュタイン博物館に靴や毛皮があり、これらの一部は墳墓や沼沢地のものである。靴は毛面を内側にし、踵は無く、飾りや刻みが付けられている¹⁾。5世紀頃には、北欧特にスウェーデンから高価な毛皮製品がドイツさらにはローマにまで交易されていた。ゲルマン人は青銅製ばかりではなく、革製の甲冑や楯も使用した。靴は1枚の革で足を包み、革紐で締めるものであった。アダムクリシヤパリ、ローマのレリーフや銅像から、初期青銅器時代から革バンドで吊るしたズボンを穿き、革靴を履いていたことが推定される。5世紀末には、踝までの革靴を履き、また西ゴート人貴族が馬革の靴を履いていたことは確かである¹⁾。6世紀以降のスカンジナビア半島での風習として、舟を陸に上げ、その中に死者を埋葬したが、その舟墓の副葬品に馬や牛、犬の家畜の他に靴や馬具、革で覆った木製の楯があった²⁾。ノルウェーのオーゼベリ(オスロフィヨルド西海岸)では、船の舳先に獣頭形あるいは動物文の装飾に金工や木彫の他に革細工がなされ、ヴァイキング美術の一典型となっている¹²⁾。

5. まとめ

古代のギリシャ・ローマにおいて、革は日用品ばかりでなく、軍用品として利用された。革製のサンダルや靴が一般的に使用され、またぶどう酒や油、水を入れる革袋

にも使用された。ギリシャ時代の鎧は青銅製であったが、革製の草摺が付けられた。ローマ時代には鎖帷子と小札鎧が登場したが、後者には革製のものもあった。両時代の楯は青銅と革が共に使用された。

文 献

- 1) Körner, T.: "Handbuch der Gerbereichemie und Lederfabrikation", I -1, (Grassman,W., Hg), Springer-Verlag, Wein, (1944) P. 1.
- 2) Waterer, J. W.: "A History of Technology", The Clarendon press, Oxford, (1956) P.147.
- 3) アレクサンドロス大王と東西文明交流展, 兵庫県立美術館, 2003. 11.
- 4) ホメーロス 呉茂一訳: 世界文学全集 1, ホメーロス イーリアス オデュッセイア, 河出書房, (1969) P. 3.
- 5) 桜井万里子, 本村凌二: 世界の歴史 5, ギリシアとローマ, 中央公論社 (1997) P. 89.
- 6) Joep, E.M.: "A History of Technology", The Clarendon press, Oxford, (1956) P. 537.
- 7) 吉村作治編: NEWTONアーキオ 6, ギリシア文明, ニュートンプレス, (1999) P. 54.
- 8) Saxl, H.: "A History of Technology", The Clarendon press, Oxford, (1956) P.187.
- 9) 吉村作治編: NEWTONアーキオ 3, エーゲ海文明, ニュートンプレス, (1998) P. 112.
- 10) 竹之内一昭: 延喜式から読み取れる古代の皮革, 皮革科学, 54, 111 (2008) .
- 11) ポンペイの輝き展, Bunkamura ザ・ミュージアム (東京), 2006.5.
- 12) 世界考古学事典 上, 平凡社, P. 969 (1979).